37
嶋基宏
Motohiro Shima
27
岡島豪郎
Takero Okajima
7
松井稼頭央
Kazuo Matsui
6
藤田一也
Kazuya Fujita
5
牧田明久
Akihisa Makida
NIPPON CHAMPIONS
NPB 2013

Nippon Series 2013

永谷脩=文
text by Osamu Nagatani

［インサイド・レポート］

楽天野手陣、結束Vの全内幕。

「フォア・ザ・チーム」の精神で〝つなぐ野球〟に徹し、
粘り強い打撃で巨人の投手陣を打ち崩した楽天打線。
第1戦から第7戦まで、彼らの知られざる闘いを描く。

33 銀次 Ginji

3 ケーシー・マギー Casey McGehee

25 アンドリュー・ジョーンズ Andruw Jones

23 聖澤諒 Ryo Hijirisawa

ロッテとのクライマックスシリーズを制した後、銀次は、主将の松井稼頭央に訊いた。
「カズオさん、日本シリーズって打撃戦になるんですかね？　相手は巨人ですよ」
松井は答えた。
「絶対、重苦しい試合になるよ。相手投手だっていいし、そんなに点は取れない。でも、それは俺たちの望むところだよ。センター中心に打ち返していくしかない。巨人は長打狙いだけど、俺たちはつないでいこう」
活路は、つなぐことから生まれる。いつも何気ない会話からさりげなくそう伝えられてきた銀次は、黙って頷いた。「カズオさんの言葉にはいつも含蓄がある」という信頼感が、野手陣の支えになっている。
星野仙一監督はシリーズ前日の監督会議で、〝王者・巨人だから〟と胸を借りるフリをして、予告先発を申し入れた。星野監督はスタメンについて「6番と9番を除いて、固定メンバーでいく」と明言。6番と9番を、相手投手が右か左かによって使い分けることを決めていた。事前に相手投手がわかる予告先発は、非力な楽天の方に、より有利に働く。その〝策〟に原辰徳監督が乗ってきた時、楽天の野手の間には「ウチの監督の方が一枚上手だ」という安心感が漂った。初めて迎える頂上決戦を前に、銀次などは「CSの方が緊張した」と話すほど余裕を持って臨むことができていた。
直前のミーティングでは、「ともかく体を張っていこう」ということと、「センターを中心に、逆方向狙いに徹していこう」という打撃の基本を確認。さらに、スコアラーが集めたデータの再チェックを行なった。内海哲也と杉内俊哉の両左腕に対しては、落ちるボールを引っかけないこと、スライダーはセンター返し、と対策が徹底されたのだった。
そして迎えた日本シリーズ第1戦。巨人の先発はエース内海哲也。いくら予備知識があっても難攻不落、簡単には打ち込めない相手である。楽天はルーキー則本昂大の力投に応えられないまま、0−2で完封負けを喫した。
8回、マウンドを降りた則本にアンドリュー・ジョーンズがこう声をかけた。
「次は必ず、ハッピーにする」
則本は、「この言葉に救われた」という。
星野監督が「柱ができれば枝葉はどうにでもなる」と信頼を寄せる主砲のジョーンズとケーシー・マギー。この二人が見せるナインへのさりげない配慮は大きな力になっている。第1戦でゴロばかり打たされた銀次は「ボールになる球に手を出している」とジョーンズに指摘され、ハッとしたという。
第1戦で放ったヒットは9本。無得点に終わったが、それでも、田代富雄打撃コーチは「明日につながる敗戦」と言い切った。それは、打球の多くが逆方向へのもので、ミーティングでの指示が徹底されていたからだった。
田中将大が満を持して登板した第2戦。0−0で迎えた6回表、ピンチを背負った田中に駆け寄るマギーの姿があった。「お前は大丈夫だ」と何度も声をかけ、松井もまた、こまめにマウンドに足を運んだ。「若い投手を支えてくれたのは、この二人だ」と佐藤義則投手コーチも言う通り、打撃だけでなく、ピンチに立たされた時のアドバイスで、投手はどれだけ救われてきたことだろう。田中はこの2死満塁の場面で、マギーの「思い切れ」という言葉通り、ロペスにストレートを投げ、三振に打ち取った。
その裏、1番の岡島豪郎が逆方向のレフト前ヒットで出塁すると、藤田一也がきっちり送りバントを決める。昨季、DeNAから移籍してきた藤田は、移籍後、「なぜトレードになったのか考えた」という。自分なりに出した答えは、自己犠牲が足りなかったから、だった。そして今季は33個の犠打を記録。星野監督が「俺が2番にした理由がわかるやろ」と自慢するほど立派な2番打者になった。
この試合初めて作ったチャンス。ここで銀次がセンター前に先制タイムリーを放つ。前日のジョーンズのアドバイスを生かした一打だった。続く7回には藤田のしぶとい内野安打で、貴重な追加点が入った。
ロースコアゲーム特有の重苦しい空気の中、徹底したセンター返しを実践してもぎとった1勝。松井は「気分が楽になって、東京に行くぞ！」と大声を張り上げていた。
「杉内を攻略するには、3回までボールになる球を見逃すこと。そうすれば、苦しくなった杉内は内側を攻めてくる」
先乗りスコアラーとして巨人についていた関口伊織は、第3戦に先発する杉内攻略の糸口をそう報告していた。
第3戦で6番に起用されたのは、牧田明久。楽天の創設時メンバーである牧田は、生き残りをかけて、与えられた出番では必死になって頑張る。こうした野手間の競争もまた、今季の楽天の強さを支えるものだった。
2回、楽天に早くもチャンスが訪れる。そのきっかけをつくったのは、牧田が起用に応えて放ったセンター前ヒットだった。続く松井はライトへ弾き返す。牧田は三塁を欲張ってアウトになったが、それでも続く嶋が7球粘って四球を選び、岡島の死球で満塁に。ここで藤田、銀次が連続二塁打を放って一挙4点を奪い、杉内をKO。試合を決めた。
「カウント1−1からストライクを取りたがるのは、杉内のソフトバンク時代からのクセなんですよ」と語るのは、小池均スコアラー。「それを思い切りよく振ってくれました」と、小池は藤田と銀次の打撃に目を細めた。
2勝1敗とリードして迎えた第4戦を前に、捕手で登録されている岡島は言った。
「自分が投手をリードしているつもりで打席に立て、と嶋さんに言われてます。それを意識して打席に入ったら、配球が読めるようになった。今は塁に出ることだけを考えてます」
岡島には、シリーズ前、打撃コーチからこんな〝1番打者の心得〟が与えられている。
「コントロールのいい内海には積極的に、球に力のある菅野(智之)は追い込まれる前に、立ち上がりの悪い杉内はじっくりと攻めろ。そしてコントロールの悪いホールトンも、じっくりと見て入れ」
第4戦の初回、岡島は先発ホールトンに対し、〝心得〟通りじっくり球を見極めて四球を選ぶ。動揺したホールトンは藤田に死球を与え、1死一、二塁になったところでジョーンズに本塁打が飛び出し、楽天はいきなり3点のリードを奪った。5回に逆転を許したが、続く6回、松井が出塁すると、嶋がきっちり送り、ここで、レギュラーの座を一度は失い、目の色が変わったかつての1番打者・聖澤諒が同点打を放った。以前の楽天には見られなかった粘り。結局、7回に勝ち越しを許して試合には敗れたものの、「これまでなら逆転されたところでシュンとなるのに、よく追いついた」と、田代コーチも星野監督も光明を感じられる敗戦だった。
これで2勝2敗のタイにされたが、選手の間に暗い雰囲気がまるでなかったのは、仙台に戻れるという安心感があったからだろうか。銀次が言うように「失うものは何もない」という思いが強かったのかもしれない。

不敗の田中もいるけれど、自分たちには絶対の東北のファンがいる――。

これこそが今季続けてきた楽天の勝ちパターンだ。

銀次や枡田慎太郎が松井に食事に連れて行かれた時、いつも聞かされる言葉がある。
「野球はミスがあっても、取り返しのつくスポーツやから」
第5戦は、第1戦で1点もとれなかった内海が先発。楽天ナインは「取り返そう」という強い気持ちで臨んでいた。
3回、松井がセンター返しで出塁すると、嶋がエンドラン。打球は一塁手ロペスの頭上を越えて一、三塁と、チャンスが広がった。
星野監督がシーズン中、7番・松井、8番・嶋の打順を崩さなかったのには理由がある。松井が塁に出れば、右打ちの上手い嶋を使って、様々な仕掛けができるからだ。「二人だけで決めた」というサインでエンドランをかけたこともあった。

Naoya Sanuki

1死後、岡島は「コントロールのいい内海」に対し、積極的に打ちに出た。2球目を三遊間に流し打って、松井が生還し、先制。さらに銀次がライト前に運び、追加点を挙げる。銀次は、この日の第1打席の二塁ゴロで、内海に4打席連続の内野ゴロを喫していた。ここで思い出したのが、ジョーンズの「目線を上げたらいいよ」という言葉。その助言通りのバットコントロールが呼んだ2点目だった。

下位でチャンスを作り、上位で得点を挙げる。これこそが今季の楽天の勝ちパターンだ。9回に同点に追いつかれるも、延長10回、2点を奪って突き放し、日本一に王手をかけた。星野監督が「本当にしびれるような試合だった」と振り返った一戦の重みを、聖澤はこう振り返った。

「シリーズが始まるまでは〝強い巨人〟という意識があったけど、全員が〝いける〟と感じたと思う」

嶋は、こんな思いを胸に、東京を後にした。

「不敗の田中もいるけれど、自分たちには絶対の東北のファンがいる――」

第6戦、楽天の先発は不沈艦・田中。この大事な一戦で、楽天はまたもや先取点を奪った。2回1死後、巨人の先発・菅野に対し、枡田が8球粘って四球で歩くと、松井は6球目を打ってライト線に運ぶ。これがエンタイトルツーベースとなり、二、三塁。この時、次打者の嶋は打席に入りながら考えていた。自分に対する配球が内角に偏っていることに気づいていたのだ。「阿部（慎之助）さんは内角を攻めてくる」と読んだ嶋は、4球目の内角球を思い切り引っ張った。強い打球が三塁に転がる。走者の背中に送球が当たるのを恐れた村田修一は本塁へ投げられず、先制点が入った。さらにロペスのトンネルで2点目も入り、誰もがこれで楽天の日本一は決まりと思った。

だが5回、そのロペスに一発が出て試合は振り出しに。さらに田中は連打を浴び、まさかの逆転を許してしまった。打たれた田中のもとにマギーが歩みより、何度も何度も首筋をさする。それは、野手たちがこれまで抱いてきた田中への思いを表しているかのようだった。

敗戦後のロッカールームで、主将の松井は「田中の160球に報いるため、明日は絶対に勝とう」とだけ言った。銀次も「自分が絶対に打つ」と誓ったという。嶋は「完投してくれたことで、よーし、という気持ちになったかもしれません」と、のちに振り返った。

第7戦は総力戦だ。勝ちたいという思いが強い方が勝つ。

「どんな形でも欲しい」と松井が話していた先制点が、初回、坂本勇人のエラーという思わぬ形で楽天に転がり込んだ。「立ち上がりをつぶせ」というデータ通りの攻撃で先発の杉内を攻めたて、続く2回にも嶋の四球と岡島の二塁打で1点を追加。さらに4回には、牧田がソロ本塁打を放ち、試合の主導権を握り続けて、3－0で快勝。ついに悲願の日本一を達成した。

今回のシリーズで、楽天の打者は自分のやるべきことを理解し、それを徹底していた。それはセンター中心、逆方向へのバッティングであり、データに忠実な投手攻略法だった。ジョーンズ、マギー両外国人の「フォア・ザ・チーム」の精神をサポートしたのは、メジャー帰りの松井だった。岡島、藤田、銀次の左トリオは、つなぎのバッティングを見事に実践。そして嶋や聖澤は、何とかして出塁を、という気持ちで打席に立ち続けた。投手ばかりが目立つ楽天だが、彼らに〝後につなぐ〟気持ちがあったからこそ勝ち取れた日本一だった。

野球を始めてから今まで一度も日本一になったことのなかった松井は、9回の守りについた時、体に震えが来たという。そして試合後、後輩たちにこう言った。

「なっ、重苦しい試合が続いたろ。こうやって強いチームになっていくんだよ」

それを聞いた全員が、黙って頷いた。■